悪行を重ねた令息は断罪されたくないので生き方を変えました

Characters



キース

ジェイミーと近しい
大人しめな令息。
ブライアンとジェイミーの仲を
応援している。

ブライアン

巻き戻る前のショーンの婚約者。
回帰後、急に様子が変わった
ショーンに戸惑っている。

ジェイミー

ブライアンの幼馴染で恋人。
自分をいじめる
ショーンを嫌っていた。

エイドリアン

ショーンの兄の友人。
実は幼い頃からショーンを
気にかけており、
学園の交流会を機に
接近する。

ショーン

わがままな癇癪持ちで、
婚約者の愛する人を執拗に
いじめた結果毒殺された令息。
死に戻ってからは
静かに生きようと決意する。

序章

誰も僕を愛してくれる者はいない。父上も母上も侍従達も、みんな兄上に夢中で僕に注意を向ける者など誰もいなかった。

雪の酷い夜、僕は一人で歩いていた。

前から歩いてくるみすぼらしい老人をみんなが避けて通る。ふらふらと倒れてもみんな素知らぬふりだ。

ウケる。僕よりも嫌われているじゃないか。

ポケットに手を突っ込むと、銀貨が一枚入っていた。これがあれば温かい宿に泊まって、体力を回復することができるだろう。そうすれば、運が良ければ仕事も探すことができるかもしれない。

それはほんの気まぐれだった。

僕が近寄ると、老人は驚きに目を見開いた。

「やる」

ぞんざいにそう言って、老人の手に銀貨を握らせた。

思えば最低な人生だった。

侯爵家に生まれ経済的には恵まれておりその点での不自由はなかったけれど、誰にも愛されなかった僕はいつも飢えた状態だった。だから誰かに関心を持ってもらいたくてことさら横暴に振る舞った。結果誰からも相手にしてもらえなくなった。今考えれば当然のことだ。

そんな僕だったから、侯爵家のブライアン・モーリス・ケンブルとの婚約話が持ち上がったときは天にも昇るぐらい嬉しかった。まだ正式に婚約が決まったわけでもなかったのに、僕は一人だけすっかりその気になっていた。話が持ち上がったからには、とんとん拍子で婚約も決まると思ったのだ。家族にすら興味を持たれなかった僕にも、初めて愛してくれる人が現れたのだと、そう思い込んだ。

相手にだって好みはあるのに、そんなことすらその時の僕にはわからなくて、勝手にブライアンにのめり込んでいった。ブライアンが本当は誰を好きなのか知りもしないで。

――ジェイミー・マクドナルド・パウエル。パウエル伯爵の次男でブライアンの幼馴染だ。

僕はブライアンとジェイミーが恋人同士と知った時どうしても許せなくて、ジェイミーをブライアンから引き離そうと考えた。

だけどジェイミーはかわいい顔をしていながらとても気が強かった。僕がブライアンに近づかないでと言っても聞いてもらえなかった。だから思いつく限りの嫌がらせをしたんだ。

彼の持ち物を捨てたり醜聞を垂れ流そうとしたり、それでもブライアンがジェイミーをかばうもんだから僕は段々エスカレートして彼への嫌がらせも過激になっていった。池に突き落としたり後ろから殴ったり蹴ったり。果ては階段から突き落としてしまった。

それがやってはいけないことだなんて、あの時の僕にはどうしても思えなかった。

そして今に至る。

ああ、どうして僕はあんなにバカだったんだろう？

結果、牢屋に入れられて一生を過ごすことになってしまった。粗末なものを食べて外に出ることもかなわず一生を終えるのだ。

ぱさぱさのパンに具材の少ないスープ。これが僕の食事だ。

それでも温かいだけマシかとスープを飲んだとたん喉がひりつき全身が痙攣した。

毒だ。

……僕はそれほどまでに嫌われていたのか。

もしも人生をやり直せたなら今度は、誰にも相手をされなくても誰も傷つけず、そして穏やかに生きたい。

もう遅いけどな。

ガハッと血を吐いて、僕は絶命した。

第一章　今度こそ間違えないようにと頑張りました

がばっと僕は飛び起きた。
ぐんっと足を床下に引きずり込まれるような嫌な感じで、びっくりして飛び起きたのだ。
え？
目が覚めて驚いた。冷たい石造りの小さな牢屋の中にいたはずなのに、ここはマクラーレン侯爵家の僕の部屋だった。
どういうことだ？
あれは夢だった？
だけどそれは違うとすぐにわかった。思い出したのだ。毒を飲み込んでしまったあの時の気持ち悪さと熱さと具合の悪さを。
吐き気がこみ上げてきた。気持ちが悪い。
「なんで……僕は生きているんだ？」
困惑でうまく頭が働かない。わからない、わからないけど。僕は奇跡的に生き返ったということだ。
コンコン。
ドアがノックされてビクッとした。
「ショーン様、お目覚めでしょうか？」
メイドのマリーの声だ。
「あ、ああ。起きてる」
返事をしてあれ？　と思った。マリーは僕が酷い癇癪を起こした時に突き飛ばして怪我をさせ、投獄される少し前に侯爵家を去って行ったはずだ。そのマリーがなんでまだ家にいるんだろう？
頭が混乱してくる。いったい今はいつなんだ？
マリーがドアを開けて入ってきた。
「起きていらっしゃってよかったです。アラン様はすでに朝食を召しあがっています。ショーン様も支度を致しましょう」
「う……」
兄上と比べられたことにまたついイラッとして、うるさいなあと言いかけて口を閉じた。
本能が、このままではまた何も変わらない運命を辿ると警告を発していた。
「あ、ありがとう、頼むよ」
「……っ、えっ？　は、はいっ！」
僕の素直な態度にマリーは心底驚いていた。驚きすぎて挙動不審だ。
「あのさ、ちょっと聞くけど。今日は何年の何月、何日だっけ」
僕の問いにマリーは一瞬きょとんとした後、「今日はコバルト暦七八〇年一〇月三〇日です」と

言った。
「……え？」
七八〇年の一〇月って、僕が死ぬ一年も前じゃないか。
婚約話がただ持ち上がったっていうそれだけのことで、婚約者でもないのにブライアンのことを追いかけまわして嫌われていた時だ。
ということは、死ぬ直前に戻ったということではなく、少し猶予をもらえたってことなんだ。
ほんの少し希望が見えてきた。
もしかしたら僕の罪の酷さに怒った神様が、もう一度同じ罰を下そうとしてるのかと一瞬そんな考えが頭をよぎっていたから。
ということは、これから先の出来事を回避できるかもしれないんだよな。
あんな惨めで恐ろしい最期をもう一度経験しないといけないだなんてごめんだ。そのためにはどんな努力だってしてやる。
それが今度の僕の目標だ。

「兄上、おはようございます」
僕が挨拶をして席につくのを見て、兄上が目を見開いた。
「ああ、お、おはよう」
よほど驚いたのか、僕が食事をしているのをスプーンを持ったまま凝視している。

「何見て（るんだよ、気持ち悪いな）……らっしゃるんですか？」
危ない危ない。また暴言をはくところだった。今回は穏便に過ごすって決めたんだからな。
「ああ、いや……。今日は早いんだな」
「はい。そろそろマリーに迷惑をかけるようではいけないなと思いまして」
「ああ……そうか。うん、いいことだ」
「はい、ありがとうございます」
戸惑いを隠せない兄上が可笑しい。
だけどそんな気持ちをおくびにも出さずににっこり笑うと、兄上はぎこちない笑顔を返した。
毒殺されないためには、僕の普段の言動にも気をつけなければならない。きついだなんてもちろん言っていられない。
現在の日付から考えれば、このころはブライアンだけではなく、みんなからも陰口や悪口を叩かれていた。兄上だって、学園内で僕を見かけても眉をひそめて遠巻きに見ているだけだった。
あ、でも一人だけ、こんな僕に対しても話しかけたり注意してくれたりする人がいたな。兄上の親友でサヴィル公爵家の嫡男、エイドリアンだ。うざいと思っていたけど、今から考えたら彼はとても親切だった。
「もう支度はできているのか？」
食事を終えた僕を見て兄上が問い掛けてきた。
「はい」

「そうか。では行こう」
兄上が席を立って歩き出したので、後に続いた。
兄上と馬車に同乗するのは初めてだ。いつも僕が朝遅いせいで、置いていかれていたから。
ただ一緒に乗ったのはいいが、案の定居心地は最悪だった。何も話すことがないから、異様な静けさが漂っている。
重い空気に耐えて、ようやく馬車が止まった。
「着いたぞ」
どうやら一言も喋らないうちに学園に着いてしまったようだ。
馬車を降りると見知った顔が近寄ってきた。
「よう、あれー、珍しい顔があるな」
目が合ったので、丁寧に挨拶をしてみることにした。笑顔付きで。
「おはようございます、エイドリアン様」
「うわっ、なんだ今日は挨拶もしてくれるのか」
やっぱウザい。
顔をしかめただろう僕を見ても、エイドリアンは楽しそうだ。
「様はいらないよ」
「えっ？」
「エイドリアンでいい」

「えっ、でも」
僕が戸惑っているのはわかっているだろうに、エイドリアンは引く気がないようだった。もごもごしていると、エイドリアンは腰に手を当てて小首を傾げた。
「しょうがないな。呼び捨てが難しいなら、エイドリアンお兄様と呼べ」
「エイドリアンで！」
すかさず反応した僕に、エイドリアンは爆笑した。
「いいなあ、アラン。お前の弟、俺好きだわ」
「それはよかったな」
兄上は疲れた声を出しているのに、エイドリアンは気にもせず笑顔で頷いている。
エイドリアンは、サヴィル公爵家の嫡男だが気さくな性格だ。だから親友である兄上に対して、敬語を使われるのを嫌がったようだ。おかげでこの規律正しい兄上までもが、エイドリアンに対してはぞんざいな口調になっている。
とにかく変わっているのだ、この人は。
「ブライアン様、おはようございますー」
聞き覚えのある甘くて少し高めの声が耳に入ってきた。ジェイミーだ。
殺される前の僕だったら、きっとこの声を聞いたらブライアンのもとに突進して行っただろう。
でも今度は、もう間違えたりしない。気のない相手を振り向かせようだなんて、もうそんな馬鹿なことはしないしジェイミーのことも無視だ。

視線を感じて顔を上げると兄上がじっとこちらを見ていた。
「……何ですか？」
「えっ？　ああ、いや」
どうせ僕がまた、ブライアンの所に走っていくと思ったんだろう。それなのに動こうとしない僕を、不思議に思っているというところか。
笑える。
ほんと笑えるよな。短絡的でバカだった自分が。
突然ぐいっと肩を引き寄せられてびっくりした。
「遅刻しないように歩こうぜ」
えっ？　えっ？　えっ？
誰かと肩を組むなんて経験がなかったからびっくりしてしまった。エイドリアンは戸惑っている僕を気にすることなく、そのまま肩を抱いて歩き続ける。兄上はその隣に並んでいる。
おかげで、まるで仲がいい兄弟のように校内を歩くという、初めての経験をしていた。

☆★☆★☆★

俺がショーンに初めて会ったのは、アランの五歳の誕生日パーティーの時だった。
あの頃の俺はまわりの大人に甘やかされていたせいもあり少々、いや、結構な悪ガキだった。勝負事が好きで腕相撲をしたりボール投げをして距離を競ったりかけっこをしたり。大抵何にでも勝つものだから調子に乗っていた。
アランの誕生日パーティーには親しい友人達が招待されていたので、前日からすごく楽しみにしていた。それで招待された側だというのにいい気になって、俺は友人達に誰が一番早く会場の庭を一周できるか勝負しようと持ちかけた。たしなめるやつもいたけれど、結局俺の強引さに負けて、何人かが俺の挑戦を受けて立った。
俺はパーティーに来ている人達を上手によけながら一番速く走った。やっぱり俺が速いんだと調子に乗っていたら、鮮やかなブルーのドレスがいきなり目に飛び込んできた。ぶつかると思って慌ててよけようとして、俺は自分の足に自分でひっかかって倒れ、体のあちこちが痛くなるくらいごろごろと盛大に転がった。
俺の惨事に辺りはしんと静まり返った。
もうそれから俺はパニックでどうしていいのかわからなかった。友人のパーティーの真っ最中にはしゃいで迷惑をかけて無様に転んで恥をかいた情けない奴。それがその時の俺だ。
立ち上がるのすら恥ずかしくてしゃがんだままでおろおろしている俺の前に、小さな足が近づいてきた。
「あげる」
「え？」
何をと思って顔を上げると、ツンと顎を上げ不機嫌な表情を見せながら、ぶっきらぼうにキャン

ディを差し出す天使がいた。
それはもう本当に、天使と評する他ないような愛らしい容姿をしていた。白い肌にぱっちりとした瞳、ローズ色のかわいらしい唇に、淡いブラウンの柔らかい髪がふわふわと揺れていた。
惚けて口を開けたまんまの俺に、天使はさらに「ん」と言って再度キャンディを突き出した。俺はのろのろと手を差し出してそのキャンディを受け取った。多分俺はそのキャンディをすぐ口に放り込んだと思うのだけど、味なんてもう全然覚えていない。その後母上が慌ててやってきて、俺がぶつかりかけたマローニ伯爵夫人とアランやマクラーレン侯爵に謝るように諭された。もちろん俺は素直に謝りに行ったよ。
その後なんだよな。アランに、あれがショーンだと教えてもらったのは。
出来損ないでわがままで癇癪持ちなショーン。
だけど俺にはそんなうわさ通りな子には見えなかった。だって本当にそんな子だったとしたら、俺があんな風に恥ずかしくて落ち込んでいるときに、声なんかかけて励ますようなことするわけないだろう？
それから俺はマクラーレン侯爵邸に度々遊びに行った。ショーンに会えないかと期待してだ。だが、不在ではないはずなのに、ショーンにはなかなか会えずにいた。
だがそれからしばらくしてアランに庭園を案内してもらっていた時、チャンスが訪れた。事情は忘れてしまったが、侍従がアランを呼びに来て、暫く彼が俺の前からいなくなったのだ。そのときアランはその侍従に、俺の相手をするように言いつけたが俺は却ってショーンを捜すチャンスだと思い断った。屋敷の中に勝手に入るわけにはいかないけれど、もし運が良ければショーンが庭に出ていて会えるんじゃないかと期待したのだ。ぐるっと辺りを見回して、手入れの行き届いたこの庭にはいそうにないと判断し、はなはだ失礼だと思いつつも、使用人が出入りする裏の方へと回ってみた。その時の俺は勘が冴えていた。
ショーンらしき少年の怒声が聞こえてきたのだ。走ってその場に行ってみると、少年二人となにやら揉めていた。後で確認したのだが、彼らは侯爵家で働いている庭師夫婦の子ども達だった。
「お前その足退かせよ！」
ショーンの言葉に彼の足元を見ると、一人の子が子猫を踏んでいた。
「なんでですか？　これは俺のものなんだから、俺が何したって構わないじゃないですか」
「おい、まずいだろ。ショーン様に逆らうなよ」
「何言ってんだよ。侯爵様だって見放して相手にしてないんだぞ。気にすることないだろう」
子猫がニャアと苦しげにうめいた。足に力を入れたようだ。
これはいくらなんでも酷いので間に入らなければと思った瞬間、ショーンが飛びかかっていた。
「弱ってるからって、他より劣っているからって、何してもいいって訳じゃないだろう！」
ショーンはその子に馬乗りになって胸ぐらを掴み、怒鳴っていた。子猫はその反動でその横に転がり仰向けになっていた。頭に血が上ってそれに気がつかないショーンが、その子に向かって拳を振り上げた。まずいと思った俺は、急いで子猫を抱き上げ振り上げていたショーンの手を掴んだ。
「それ以上はダメだよ。それよりもこの子猫をなんとかしなくちゃ」

いきなり現れた俺にショーンはびっくりしたようだった。それはこの使用人の子供達も一緒だった。

「なんだよいきなり……」と言いかけて、彼らは口をつぐんだ。俺の身なりを見てまずいと思ったのだろう。ショーンも訝しそうな目で俺を見ている。

全く覚えていなかったんだよな、俺のこと。正直それはちょっと悲しかった。

「いきなり現れて悪いな。俺はアランの友人でエイドリアン・スチュワート・サヴィルだ」

「えっ？　アラン様の⁉」

俺がアランの友人だと知り急にそわそわと落ち着かなくなった彼らは、二人で何やら揉めた後、

「すみませんでした！」と叫んで逃げていった。

「おいっ！　お前ら！」

ショーンが呼んでも彼らは振り向くことなく去っていった。ショーンは子猫と彼らとを交互に見ながらため息を吐いた。

「……猫、大丈夫そう？」

俺の腕の中にいる子猫を心配そうに覗き込んだ。

「かなりぐったりしているから、大丈夫かどうかは何とも言えないけど」

ショーンは指でそっと猫の額を撫でた。目も開けない子猫にショーンの眉が下がる。不安そうなその表情は、やっぱりどうしても癇癪持ちなどうしようもないわがままな侯爵子息には見えなかった。心優しい天使にしか見えない。

「この子猫達はここで飼っているのかい？」

「多分。庭師のハリス達が雌猫を飼っていて、その猫が最近子猫を生んだんだ。数匹生まれたので知人達にあげたみたいなんだけど、たぶんこいつだけが他よりちっこくて弱かったから貰い手がつかずに残ったんじゃないかな」

「そうか……」

「なんでみんな、劣ってるやつに冷たいんだろうな」

まぶたを伏せたその表情が痛々しくて、衝動的に抱きしめてやりたくなった。だけど彼はきっとそんなことは望まないだろうから、拳を握って必死にその衝動を抑えた。

脳裏に浮かんじまったんだよな。顔色を変えて瞬時に俺を突き飛ばす姿が。

「あの……？」

俯いたまま無言の俺を、ショーンは訝しく思ったらしい。眉根を寄せてこちらを見ている。

「ああ、いや、で？　この猫どうするんだ？」

「僕が世話したいけど多分無理だし……」

庭師夫婦に返す気はないのだろう。かといってアランや侯爵に頼むのも無しだと思っているようだ。

「俺が連れ帰って手当てしようか」

ショーンは一瞬目を見開いた後、パッと明るい表情になった。

「いいの？」

「構わないよ。君が良いのであれば」
「もちろんです。よろしくお願いします！」
嬉しそうに返事をした後、ショーンが体から力を抜いたのが見て取れた。
不謹慎かもしれないけれど、自分の家族よりも俺のことを信用してくれたのかと思ったら正直嬉しかった。
それから俺はアランに馬車の手配を頼んで大急ぎで帰り、子猫を柔らかい布の上に乗せ、母上の許可をもらい怪我の手当てやミルクを飲ませたりとできる限りの世話をした。だけどだいぶ弱っていたのか子猫は五日も経たずに死んでしまった。
その悲しい報告をショーンにすべきか迷って、だけど直接話をしたくてアランに頼んでみたのだけど、ショーンが何かをしでかしたらしく彼の外出は厳しく制限されていて、結局会うことは叶わなかった。
ショーンと再会できたのは彼がこの学園に入学してからだ。
わがままで癇癪持ちという彼の評判は相変わらずだったけれど、それだけじゃないことは俺がよく知っている。
それに今朝は、どういう心境の変化かいつもと様子が違っていた。アランと一緒の馬車で登校したり自分から挨拶したり、それにブライアンにまとわりつくこともしなかった。きっと自分なりに何か思うことがあったのだろうけれど、その良い変化を支えてやりたい。そしてできれば俺のことも、もっと意識してくれたらいいのにと、そう思った。

☆★☆★☆★

学園のクラス分けは成績順だ。頭のいい兄上や兄上の友人のエイドリアンにタイソンにレオは、Aクラス。
兄上と違い出来の悪い僕は、クラスもビリから二番目のCクラスだ。ジェイミーですらBクラスだというのに。
ブライアンはAクラス。みんなから憧れられるのが当たり前と言える容姿や人柄の良さに加えて、頭の良さも備わっていた。
僕に対しては塩対応だけどね。まあ当たり前か。
当然と言うべきか、僕はクラスでも浮いていて友達の一人もいなかった。口に出して言ったことはなかったけれど、やっぱり寂しかった。
教室内ではまるで僕なんかいないように話に花が咲いている。ため息を吐きながらぼんやりとそれらを眺めていると、一人だけ熱心に本を読んでいる奴がいた。
ええっとあれは、たしかグリーン伯爵家次男のエリックだ。本当は頭はいいのに、試験の日に高熱を出して本領を発揮できなかったと聞いている。実際、入学してから行われた試験の結果はAクラスの人達と肩を並べていた。
ボーッと彼を見つめていたら目が合った。びっくりした僕は、さっと視線を逸らした。

失敗した。絶対気持ち悪いと思われた。
ブライアンを追いかけ回す身のほど知らずで気持ち悪いやつ。それがココでの僕の印象だ。
もう、そんなこと絶対しないけどさ。
「ショーン様」
呼ばれて顔を上げると、エリックが立っていてびっくりした。
「もしかして、この本が気になりました？」
「えっ？」
エリックは先ほどの本を手に持っている。
はっきり言って本になんて全然興味はなかったけれど、ただ単にエリックを見ていただけだというと余計に気味悪がられそうなので、僕はうんと頷いた。
僕の返事にエリックは少し嬉しそうな表情になった。
「ショーン様も医学に興味あるのですか？」
「えっ、いや、そういうわけではないけど」
そんな高尚なものに興味はないのであわてて首を振ると、エリックは首を傾げた。
これはまずい。
エリックの持っている本をちらりと見ると『人体の基礎』と書かれている。
「い、医学とかはよくわからないけど。その……人の体って不思議だなぁと思って。ほら、男も女も子供を産めるだろ？　だけど男は孕ませることはできても女にはできないじゃないか。なんで女にはできないのかなって、ずっと疑問に思ってたから」
それほど興味があるわけではないのだけど、この場をごまかすために子供の頃に疑問に思ったことを言ってみた。するとエリックは、「ああ、それか」という表情をして頷いた。
「それは僕も不思議に思います。それでいろいろ書物を調べてみたんですけど、太古の昔の女性は、妊娠させることもできたそうですよ」
「え、そうなの？」
「はい。でも長い歴史の中で、いらない能力と判断されたものは進化の過程でなくなっていったそうなんです。なので、昔の女性と今の女性では体のつくりも少し違うようですよ。あったものがなかったりしてね」
「そうなんだ。不思議な話だね……」
「そうですね」と笑うエリックの表情から、僕への侮蔑の感情は見当たらない。
そういえば彼は、僕にちっとも興味のない人物だった。僕に関わることもなかったけれど、からかったり、悪口を言ったりすることもなかった。
彼となら、友達になれるだろうか。
「あの、エリック」
「なんですか？」
「僕は頭が悪いんだけど、一緒に勉強とかさせてもらってもいいかな？」
エリックは一瞬きょとんと目を見開き、「もちろんです」と言った。

死に戻ってからの僕のモットーは、慎重に生きるということだ。
諍いを避ける、不快な思いをさせない、執着しない。そして君子危うきに近寄らずだ。
平穏な未来を築くための僕なりの努力だ。
だから友達になりたいと思ったエリックにも、できるだけ慎重に近づいた。人はよく知りもしない相手からぐいぐい来られると多分引くだろう。僕もそうだ。
なので嫌がられない程度に距離を詰めながら、時間をかけて親しくなるのだ。
だからランチも、三日に一度ぐらいの頻度で誘っている。
今日は一人の日だな。昨日誘ったし、毎回毎回で嫌がられても困るし。
ため息をついて席を立った。本当は一人は嫌いだから。
「ショーン様！」
呼ばれて振り返ると、エリックが立っていた。
「あの、ずうずうしいかもしれませんけど、これからもランチをご一緒させてもらえませんか？」
「えっ？　いいの？」
思わず食い気味に言ってしまって慌てて口をふさいだ。
「もちろんです。一人で食べるよりも、ショーン様と食べる方がずっとずっと楽しいです」
「本当？　よかった。迷惑なんじゃないかって、ずっとそれが気になってたんだ」
「そんなことないですよ」

「……ならよかった。僕のそばにいると鬱陶しい視線が飛んでくるだろう？」
「そんなものは気にしませんよ。悪いことをしているわけではないので、人の視線なんて気にする必要ないですし。それに僕は他人の意見に左右されない方なんで」
エリックはサバサバとした笑顔だ。線の細さとは対照的な、男らしい発言に感服した。
学生専用のカフェはたいそう混んでいた。カフェ自体は広くて席もたくさんあるのだけど、さすがに全校生徒が入れるほどの規模ではない。あぶれたもの達はボックスに入れてもらって、各々校庭や教室でお昼を楽しむことになる。
「あっ、あの奥の席空いてますよ」
「えっ？　ああ、あそこか。誰かに先を越されたら困るな。僕が二人分取りに行ってくるから、エリックはあそこの席で待っていてよ」
「えっ？　取りに行くんなら僕が行きますよ」
「いいからいいから、頼んだよ」
僕は有無を言わさずさっさとランチを取りに向かい、無事に二人分のランチ定食を手にしてエリックがとっていてくれた席へと向かった。
だけど席が近づくにつれ、どこに誰がいるのかがわかり愕然とした。あろうことか、ブライアン一行がエリックのいるテーブルの斜め向かいに座っていた。
エリックは僕に気がつくと、さっと立ち上がってトレイを受け取った。
「ありがとうございます、ショーン様」

そう言いながら眉を下げたのは、僕がブライアンらとあまりいい関係ではないと知っていたからだろう。だからと言って今日の混み具合では、別の席を探すのも一苦労だ。

ジェイミーは、僕の姿を見るのも嫌だというようににらんでいる。ブライアンも少しうんざりとした表情だ。

「ね？　僕の言った通りだったでしょう、ブライアン様。ショーン様が、そんな簡単にブライアン様を諦めるわけないと思ってたんですよ」

ぴくっと体がこわばるのがわかった。たった数日ブライアン達を避けているだけでは、今までの行動がなかったことになる訳がなかった。反論したかったけれど、僕が口を開くと余計悪い方向にいってしまいそうで躊躇した。

「いっ、言いがかりです」

エリックが震える声で反論した。僕はびっくりして彼の顔を見る。

今までこんな風に誰かに反論することなんて、きっとなかったんだろう。顔は緊張で青ざめていた。

「はっ？　何言ってるんだよ？　わざわざ斜め向かいの席なんか取ってるくせに」

「そうだよな」とジェイミーの隣に座っているトーマスが頷いた。ブライアンは冷めた目で僕を見ている。

「確かに混んでるかもしれないけれど、探せば他にも席は空いているだろう」

冷たいブライアンの声に、ひくっと喉がなった。

「えー、そんなに必死になって避けなきゃダメなわけ？」

エイドリアンの声だ。言いながら、僕の肩を引き寄せている。

びっくりして顔をあげたら、思いのほか顔が近くて慌てて顔を下げた。

「自意識過剰なんじゃないの？」

「なっ？　いくらエイドリアン様でも、失礼ではないですか？」

「そうかい？　ならそれは、君達にも当てはまるんじゃないのか？」

エイドリアンの言葉に、ブライアン達はぐっと押し黙った。

「おい、アラン。向こうに二つ席が空いているから、レオと一緒に座ってこいよ」

「えっ？」

「これだけ混んでいると、とてもじゃないけど四人一緒の席を探すのは面倒だ。俺とタイソンはこっちに座るから」

「ああ、わかった」

兄上はちらりとこちらに視線を向けた後、レオと一緒にエイドリアンが指した席へと向かった。

エイドリアンは僕の隣に腰掛けた。タイソンはその隣に。そのせいなのかなんなのか、ジェイミー達は静かになった。時々授業の話をする声が聞こえてくる程度だ。

「そういえば、一月後に交流会があるんだけど知ってるか？」

エイドリアンが僕の方に顔を向けて聞いた。長い睫毛が目について、ちょっぴりドキッとした。

これだから顔のいい人は嫌なんだ。今までの僕だったら、こんな風に間近で話しかけられただけ

できっと変な期待をしたはずだ。
「……き、聞きましたよ。ようするに、政略結婚で婚約した人達の交流を目的としたパーティーでしょう？　一応全員参加なので参加はしますけど、僕には関係ないものです」
「そんなことはないさ」
「えっ？」
「婚約者はいなくても、貴族には将来的に社交が必須だろう？　その練習と捉えればいいさ。それに、この交流会で気になってる相手にパートナーになって欲しいと申し込むことで、その後進展していく可能性もあるだろう？」
「まあ、そうですね」
相槌を打ちながらも、僕は苦々しい気分になる。
ああ、嫌だな。黒歴史をやり直さないといけないなんて。
この交流会でも僕は必死だった。ブライアンにパートナーになって欲しくて、ジェイミーとあちらこちらで言い争いをしていた。おかげで余計ブライアンに嫌われていったんだよな。
ため息しか出ない。
「エイドリアンは、パートナー決まったのか？」
パンを頬張りながら、タイソンが聞いた。
「いや、まだ」
「あれだけたくさん申し込まれると、やっぱりなかなか決められないか？」

「というか、ちょっと様子見してる」
「これだからな、モテる奴は」
「そうでもないよ」
タイソンの言う通り、エイドリアンはモテる。精悍（せいかん）だけど、色気ある顔つきが人目をひくのだ。
それに加えて気さくな人柄にギャップを感じる人が多いのだろう。ブライアンとは違う意味でモテる人なんだ。
「ところで、君の名前は？」
エイドリアンがにゅっと顔を出してエリックに聞いた。
「えっ、あっ、は、初めまして、エイドリアン様。エリック・L・グリーンです」
「エリックか、よろしくな」
「ついでで悪いがタイソン・チャップリン・インマンだ、よろしくな」
「こちらこそ、よろしくお願いします」
大きめの声で返事をしているが表情が硬い。どうやらエリックは緊張しているみたいだ。
それはそうだよな。いきなり公爵家の、しかも目立つエイドリアンから声をかけられたらびっくりするよ。
それにしても、交流会か。どんなに頑張っても僕にパートナーができるわけないし、おとなしく壁の花でいるかな。いや、僕なんかじゃ花にもなれないか。
昼食を終えた僕らは、エイドリアンらと別れて教室に向かった。

「エリックは、誰か誘いたい相手はいるの？」
「僕ですか？　そんなの考えたこともないです」
「好きな子とかいないの？」
「……かわいいなと思う子はいますけど」
「ええっ、本当？　誰、誰？」
「しーっ、大きな声出さないでくださいよ」
「ご、ごめん。教えてもらってもいい？」
「誰にも言わないでくれますか？」
「もちろん！」
うんうんと、首を縦に振った。エリックは辺りを見回してから僕に耳打ちをした。
「フローラ・エミリー・クレーブン。僕のいとこの友人です」
「フローラ嬢？　いとこの友人って、君とは仲いいの？」
「仲がいいという段階ではないです。いとこも一緒にお茶を二、三回したくらいですから」
「お茶を二、三回したくらいって、……かわいい子なんだ？」
「はい。目立つことはないですけど、どちらかというと控えめなタイプだし。でも僕に言わせると、とても愛らしい子なんです」
フローラ嬢の話をするエリックの目はとても優しい。本当は、言ってるよりもかなり好きなんじゃないだろうか。

「今度頑張って、パートナーになって欲しいと申し込んだらどうだい？」
「えっ？　いえ、急に僕なんかに申し込まれたら、彼女びっくりしちゃいます」
「びっくりしたっていいじゃないか！　僕だったら、君に申し込まれたら嬉しいよ？」
「えっ？」
エリックの目が真ん丸になった。なんだ、本気にしちゃった？
「たとえ話だよ。それくらいエリックは自信を持っていいってことだ」
「ありがとうございます。でもやっぱり自信ないです」
「そんなこと言って。ぐずぐずしてるうちにフローラ嬢が誰かに誘われてもいいのか？」
「――それは、嫌ですけど」
「だろ？　だったらがんばらないと。気を付けるのはさ、しつこくしないってことだけだよ。僕はそれで失敗しちゃったから」
大事な親友のためだ。彼が失敗しないようにと、僕にできる助言はしっかりしたい。
エリックはじっと僕の顔を見ている。
「ショーン様ありがとうございます。あっ」
「何、どうしたの？」
「フローラです」
エリックの視線の先には、控えめな感じのおとなしそうな子が、友人らしき人とおしゃべりしながら歩いていた。

「……僕、頑張って行ってきます」
「友達と一緒みたいだけど大丈夫？」
「大丈夫です。あれ、いとこなんで」
エリックは僕ににこっと笑って、彼女達のもとに走っていった。
どうなるだろうとどきどきしながら見ていたけれど、エリックはフローラ嬢にちゃんと申し込むことができたようだ。彼女の顔が真っ赤になり、こくこくと頷いている。どうやら彼の申し込みは成功したようだ。
やったねという思いで拳を振ると、それに気がついたエリックが、真っ赤な顔で僕にピースサインをした。

交流会が近づくにつれ、浮き立つ人達が増えてきている。また逆に、落ち込み、消沈している人も一定数いるので、パートナーの申し込みを断られた人達も結構いるのだろう。
まあ、僕は壁の花確定だから今更焦るも何もないんだけどね。
エリックがフローラ嬢と交流会に着ていくドレスのことで盛り上がっていたので、僕はトイレに行ってくるねと言って席を立った。
フローラ嬢は僕が有名な癇癪（かんしゃく）持ちだとわかっていたようなのに、エリックが友達と紹介すると受け入れてくれて、エリックがいない所で僕と鉢合わせをしても挨拶をしてくれるようになった。
エリックが好きになるだけあって、優しくていい子だ。

トイレから出て教室に向かう途中でブライアンを見かけた。どうやら呼び出されて交流会のパートナーに誘われたようだ。離れていく令嬢の様子を見るに、おそらく断られたようだ。
彼にはジェイミーがいるからな。かわいそうに。
なんて思いながら見ていると、ブライアンと目が合ってしまった。
しまったと思ったけれど、ジェイミーがいない今ならブライアンに一言ぐらいは言えるような気がした。僕が近づくと、ブライアンは一瞬身構えるような態度をとった。
まあ、そうなるよね。
「ブライアン、ちょっとだけいいかな」
「何？」
警戒しているのか眉を寄せる。
「今までごめんね」
「えっ？」
「君にはジェイミーがいるのにうるさくまとわりついて。これからは邪魔しないから」
「えっ、いや……」
突然の謝罪に驚いたのか、ブライアンは困惑した表情だった。
「じゃ、それだけだから」
これでいい。僕から話しかけなければ、もうブライアンと接することはないだろう。
誰からも好かれるブライアンに、憧れがなかったわけじゃない。だからちょっぴり寂しい気もす

るけれど、それだけだ。毒殺される未来なんかよりもずっといい。
僕は吹っ切るようにして、教室まで走った。

今日は久しぶりにエリックと自習室に来ていた。勉強を教えてもらうためだ。向かい側にはフローラ嬢と、エリックのいとこのキャトリン嬢が座っている。
「良かったのかい？　フローラ嬢と二人で話すこととかあるんじゃないの？　ほら、交流会のこととか」
二人に聞こえないようにボソッと小さくささやいた。
「別に大丈夫です。それに僕らまだ始まったばかりなので、みんなと一緒に、彼女と話すことに慣れる方が嬉しいです」
「そういうものなの？」
「そういうものです」
「よう、勉強か？　頑張ってるな」
「ひゃっ！」
突然何の気配もなく話しかけられ、ぽんと肩をたたかれて情けない声が出た。どきどきして振り返ると、苦笑いを浮かべたエイドリアンが立っていた。
「びっくりした？」
「しましたよ！　あれ？　珍しくお一人なんですね？」

いつもなら兄上やその友達らと一緒なのに、誰の姿も見えない。
「ちょっとね。煩わしいことが立て続けにあったから、自習室に避難しに来たんだ」
「煩わしいこと？」
首を傾げる僕に、エイドリアンはうっすらと微笑んだ。
「君はずいぶんとのんびりしているね」
「そうですか？」
エイドリアンが何に対して言っているのか見当もつかず、僕は首をひねった。
「あっ、でものんびりしてるわけじゃないですよ。エリックに勉強を教えてもらいにきました」
僕は胸を張る。エリックは頭がいいんだ。そのエリックに教えてもらえるんだぞ。どうだ、すごいだろう？
いやまあ、僕は全然すごくないんだけどさ。
「うーん、そうか。偉いね」
「ありがとうございます」
「うーん」
どうしたのだろう？　エイドリアンは僕から目を離さずにそのまま隣に腰掛けて、右腕を机にまっすぐ伸ばして、その上に頭を置いた。なのに視線は僕から離れない。
「エイドリアン様」
「エイドリアン」

そうだった。彼は呼び捨てをご所望だった。
「エイドリアン、何か僕に用事ですか？」
「……君は交流会、どうするんだ？」
「どうって？　どうもしませんけれど。あっ、ちゃんと出席はしますよ」
「――パートナーは決まったのか？」
「まさか。でも料理がおいしいと聞いたので、せっかくだから食べることに専念します」
哀れまれないようにとちゃんとハキハキと答えたのに、なぜかエイドリアンの表情はうかない。ぼそりと何かを呟いて、また僕の顔をじっと見る。
「……あの？」
「ちょっと話があるんだが、自習室じゃみんなの迷惑だろうから外に出ないか？」
「えっ？」
まだたいして勉強も教わってないのにと困惑し、ちらりとエリックに視線を向けた。
「大丈夫ですよ。行ってらっしゃい」
にこにこと手を振るエリックに、なぜか圧を感じる。
むむむと思うけど、なんとなくいつもと雰囲気の違うエイドリアンも気になって、おとなしくついていくことにした。
自習室を出たエイドリアンは、そのまま裏庭に行き、ちょうど木陰になるように作られたベンチに腰掛けた。たいていこういうところはカップルらが占めているので、僕は今まで座ったことはない。ちょっぴり居心地が悪い。
「あのー、なんでしょうか」
ちらりと窺った顔は思い詰めているようにも見える。なんなのだろう？
エイドリアンは、ふうと息を吐いた。そして何度か口を開けたり閉じたりした後、意を決したように僕の顔を見た。
「ショーンはまだ、ブライアンのことが好きかい？」
思いがけない問いかけに、僕は目をぱちくりとさせた。
でもエイドリアンがあまりにも真剣な表情なので、適当にごまかしてはいけないと思った。
「よくわからないです。でも、憧れは……あると思います」
自分と違い、あんな風にみんなから慕われる存在に。
もうまとわりつかないと決めた時に、寂しいと思ったのはたぶん、まだ未練があるからなんだろう。ただその感情が恋だったのかと言われると、よくわからない。執着していたのは事実だけど。
「だけど、もう彼を追いかけ回すのはやめました。嫌われてまですることじゃないですからね」
「そうか。じゃあ手始めに、俺と交流会でパートナーを組んでみないか？」
「えっ？」
思いもよらない申し出に、心底驚いた。
なんで僕？　僕なんかと組むだなんて、エイドリアンに何の得もないのに。
「ダメか？　悪い話じゃないだろ？　壁の花で居心地悪くいるよりも、楽しめると思うんだけど」

「それはそうかもしれませんけど。エイドリアンにとって何のメリットもないじゃないですか」
「そんなことはないさ。かわいいショーンとダンスを踊れる」
はっ？
にこにこと笑っているけど本気だろうか？
どうやらエイドリアンは僕が思っていた以上にお人好しなのかもしれない。親友の弟が一人で寂しそうにしているのを、きっと見ていられないんだろう。
前もそうだった。一人だけ僕を窘めてくれたんだもんな。
「わかりました。正直、僕も助かります。よろしくお願いします」
ペコリと頭を下げると、エイドリアンは嬉しそうに笑った。

☆★☆★☆★

最近少し戸惑っている。戸惑っている原因は、ショーン・A・マクラーレンだ。
父上の友人がマクラーレン侯爵と親交があることからショーンとの婚約話が持ち上がった。とはいっても正式に決まったわけではない。
彼は淡いブラウンのふわふわとした緩い癖のある髪に白い肌、そしてローズ色の唇といった容姿でかわいらしく、私好みのタイプではあった。だけど性格にかなりの難があった。癇癪持ちで常にイライラしていて、自己主張が強く、みんなの嫌われ者だった。

しかも候補と言うだけで婚約者でもないのに追いかけ回されて心底うんざりした。その上、友人のジェイミーをもライバル扱いし、よく喧嘩を吹っかけていた。
大嫌いだったんだ、間違いなく。
なのに最近様子が変わってきた。
私を見てもジェイミーを見ても、彼は何の反応もしなくなった。以前は私達を見るとすっとんできて、ギャーギャーわめき散らしていたのに。今では目も合わそうとしない。
おまけに、迷惑をかけて悪かったと謝ってきたのだ。
……調子が狂う。
おかげで最近は、彼を見ると私のほうが目で追うようになってしまった。
「ブライアン様、交流会どうなさるんですか？」
「えっ？」
「パートナーまだ決めてないでしょ？　みんな気にしてますよ」
「……ああ」
「僕も気になりますし」
ジェイミーの言葉に、トーマスやキースも頷く。
「お似合いなんですから、ジェイミーとパートナーを組んだらどうです？」と、トーマス。
キースも、「いいと思います」と満面の笑みだ。
ジェイミーは愛嬌があってかわいいからつい構いたくなるけれど、彼は気も強くしっかりしてい

る幼馴染で、何でも言い合える一番親しい友人だ。
「だけど、ジェイミーは？　何人かから申し込みを受けていただろう？　気になる人はいなかったのか？」
「いませんでした！　ブライアン様はいたんですか？」
ジェイミーは拗ねたように唇を尖らした。
「いや、私もいなかったよ」
「それじゃあ、僕のパートナーになってくれませんか？」
「えっ？」
「だって、誰かとパートナー組まないと壁の花的存在になるんでしょ？　それよりも堂々とダンスをして楽しみたいじゃないですか。ブライアン様が嫌だって言うなら仕方ないですけど……」
なるほど。ジェイミーは交流会に堂々と参加したいけど、パートナーになりたい相手がいないってことなんだな。
まあ、私も同じような状況だもんな。
「いいよ。私のパートナーになってくれるかい？」
「はい、よろしくお願いします！」
嬉しそうなジェイミーがかわいい。きっとこれで良かったのだろう。
聞けば、キースもトーマスもすでにパートナーが決まっていた。それで私とジェイミーが決まっていないことが気になっていたらしい。なんとも友達思いな二人だ。

それからすぐに、私とジェイミーがパートナーを組んだことがうわさになっていて呆れた。だけどそれと同時に聞こえてきた、ショーンとエイドリアン様がパートナーを組んだというわさに、私はなぜかショックを受けていた。

☆★☆★☆★

「……だいぶうわさになっているな」
「えっ？」
死に戻り僕が態度を改めてから、ぎこちなくはあっても少しずつ会話をするようになった兄上が、馬車の中で話しかけてきた。
だけど、なんだか疲れた様子だ。一瞬、また何か悪いうわさかと息を呑んだ。
「あの、どんなうわさでしょうか？　僕はなるべく控えめに過ごしてるつもりなんですが」
背中に冷たい汗が流れる。どきどきしながら尋ねると、兄上はそういうものじゃないと手を振った。
「ショーンのせいじゃない。エイドリアンが、交流会のパートナーをショーンに決めたと言って、他の申し込みを断ったために流れたうわさだ。あいつは自分の影響力を舐めている。何か嫌がらせとかされていないか？」
「えっ？　いいえ、僕の方は別に。ただ、時々にらまれたりする気配はあったので、まだ嫌われて

るんだなと思ってただけです」
「はあっ」
兄上は額に手をあててため息を吐いた。そしておもむろに顔を上げ、僕を見る。
「何か嫌がらせをされたら僕かエイドリアンに言うといい。我慢しないように」
「……え」
兄上が、僕のことを心配してくれている？
驚きにポカンと口を開け、それから嬉しさがこみ上げてきて目頭が熱くなった。慌てて顔をそらして、「ありがとうございます」とつぶやけば、兄上もかすれた声で「ああ」と返事をした。
ああ、どうしよう。嬉しすぎる。
だけど涙顔は見せたくなくて、僕は学園に到着するまで兄上の顔が見られなかった。
馬車を降りるとエイドリアンが近づいてきた。
「よう、おはよう」
「おはようございます」
彼はにこにこと笑いながら僕の肩を抱く。兄上がはあっとため息を吐いた。
「おはようエイドリアン。なあ、少しショーンのことを気にとめてくれよ。嫉妬の矛先が弟の方に向きそうだ」
「えっ？」
エイドリアンは驚きの声を上げ、僕の顔を見た。

「何か酷いことをされたのか？」
その真剣な表情に息を呑んだ。
「あっ、いえ、そんなことはないです」
「でもにらまれたりしてるんだろ？　遠慮せずちゃんと言ったほうがいいぞ。こいつ鈍いから」
兄上の言葉にエイドリアンが眉をひそめた。
「悪い。浮かれててそんなことまで考えてなかった」
「あ、いいえ、にらまれるくらいなら大したことないので」
ん？　浮かれて？　今浮かれてって言った？
何に浮かれてたんだろうって考えていたら、「よし！」とエイドリアンが手を叩いたのでびっくりした。反射的にエイドリアンの顔を見上げる。
「それじゃあ俺は責任を持って、ショーンのボディーガードになろう」
「えっ？」
「どうする気だよ」
「ランチも一緒にとって、自習室で勉強するときは俺も同席する。要するにショーンと一緒にいられるときは常に一緒にいるということだ」
「それ、逆効果じゃないのか？」
「そんなことはないさ」
胸を張って言うエイドリアンに、僕は首を傾げた。

最近、学園内の慌ただしさが増してきている。あちらこちらでパートナー探しが本格化しているせいだ。それもこれも、人気のエイドリアンとブライアンがパートナーを決めたというううわさが、学園中を駆け巡ったからだった。

もしかしたら彼らのパートナーになれるかもしれないと淡い期待を抱いていた人達が、その機会はもう皆無だとわかったので、本格的に相手探しに乗り出したといったところだろう。

「焦る気持ちわかるなあ」

「えっ？」

思わずこぼした言葉に、エリックのスープを掬う手が止まった。エイドリアンと兄上も僕に視線を向けた。

「あっ、えっとほら、みんな交流会で焦ってるでしょ？　それって、みんなが決まっていくなか自分だけが取り残されるような気分になるんだろうなと思って」

僕もかつてはそうだった。だから余計にブライアンに執着した。

「じゃあ、俺がショーンにパートナーを申し込んだのは、ショーンにとってもいいことだったってことだな」

「えっ？　あっ、はい」

それは、そうだ。おかげで、前回と同じようにブライアンがジェイミーとパートナーを組んだと聞いてもそれほど気にならなかった。

頷くと、エイドリアンの瞳が優しく細められた。

「ところで最近はどうだ？　嫌がらせとかそういうのはあるのか？」

「あー、そういえば最近はないですね」

嫌がらせと言ってもせいぜいにらまれながら陰口を叩かれたぐらいだ。もともと大したことはされていなかった。

「みんなそれどころじゃないんじゃないかな？　パートナーを誰にしようかって、そっちの方に気を取られているような気がするよ。この間、一人の令嬢に複数人が申し込んでるのを見たよ」

兄上の婚約者のレオが、笑いながら言った。

レオは一見冷たく見える美男子だけど、兄上に対しては一途で健気だ。どこかの令嬢が兄上に焼き菓子の差し入れをしたのを知り、それに対抗して見目のいい焼き菓子を兄上に渡していた時があった。たまたま現場を見てしまったのだけど、その時の彼の顔が真っ赤だったのを覚えている。

それでもって僕はその後余計にやさぐれたんだよな。兄上はあんなふうに愛してくれる人がいるのに、なんで僕はこうなんだろうって。

「そういえば、タイソンはどうするんだ？」と兄上が聞いた。

タイソンの婚約者は三歳下で、まだ学園に入学できる歳（とし）ではない。だけどたいそう仲がいいと聞いている。自分の婚約者がほかの誰かとダンスを踊るなんて聞いたら、きっといい気持ちはしないだろう。

「僕は壁の花ならず、食欲魔人と化しておくよ」

そう言って愉快そうに笑った。
そうだった。彼はそういう人だった。
冷静に見ることさえできれば、兄上の友人達はまあまあいい人達ばかりだ。
「嬉しそうだね」
エイドリアンが、にこにこと笑いながら僕に言った。
「えっ？」
「幸せそうに笑ってたよ」
「あっ……そうかもしれません」
そうなんだ。僕は、妬んだり羨んだりする前に自分を省みて、周りのことをもっと見る余裕が必要だったんだ。
「あっ」と小さくエリックが声を上げた。
ブライアンやジェイミー達がトレイを持って向こう側の席に歩いていくのが見えたからだ。
僕らの席を通り過ぎる際、ジェイミーと目が合った。彼は僕のことが大嫌いなので、つんと心持ち顎を上げて小馬鹿にしたような態度を取る。実際、口角が上がっていたので本気で馬鹿にしていたのかもしれない。
まあ、今の僕にはどうでもいいことだ。
「ところで交流会に着て行くタキシードは決まってるのかい？」
エイドリアンが、にこにこしながら僕に尋ねる。

「いいえ。僕はどちらかというと今まで引きこもりだったので、それ用の正装は持ちあわせていないんです」
もっとも引きこもりというよりは、問題児だったせいで引きこもらされていたと言った方が正しいけれど。
「そうかい？　じゃあ、ちょうどいい。……実は俺も新調しようと思っていたところなんだ、せっかくだからペアにしないかい？」
「ペアですか？」
ということは、色違いとかそういった？
「そうだ。俺のは淡いブラウンで、君のはダークブラウンでどうかな？　アクセントはブルーで、君のはブルーグリーンで」
「えっ、それって……後悔しませんか？」
お互いの髪の色と瞳の色を交換するってことだよね？
「なんで？　後悔するわけないよ。仲がいいんだなあって、一目でわかってもらえるだろ？」
エイドリアンは僕がみんなから嫌われていることも全く気にしていないみたいだけど。でも、みんなはそれこそ驚いちゃうんじゃないかな。僕はもうそれを受け入れようと決めたから何ともないけど、エイドリアンにはデメリットしかないような気がする。
「気が早いんじゃないのか？」
兄上が僕の気持ちに気がついたのかエイドリアンを諭し始めた。

「ショーンも驚いてるし、僕も驚いているよ。せいぜいクラバットをお互いの目の色にするぐらいにしておけば？」

エイドリアンは僕に視線を移した。そしてじーっと僕を見る。

たじたじするけれど、何も言えるわけがなかった。

「……わかったよ。アランの忠告に従うとするよ」

「結構。そのほうが君のためにもいいと思うよ。慌てるな」

兄上の「慌てるな」の意味はよくわからなかったけれど、ほっとした。婚約者同士ならそういう装いもあるかもしれないけれど、僕とエイドリアンはそんな関係じゃないもんな。

「じゃあ僕もクラバットをブルーグリーンにします」

「ああ」

僕がそう言うと、エイドリアンは微笑んだ。

「思うんですけど、エイドリアン様って、ショーン様のことが好きなんじゃないでしょうか？」

エリックがそう聞いた。

「ええっ？」

驚きのあまり、何も食べていないのにむせそうになった。

「何言ってるんだよ？　エイドリアンに失礼だよ」

「失礼って何ですか。そんなこと言う方がエイドリアン様に失礼ですよ」

「いや、だって。僕が癇癪持ちだったから嫌われてるのは君だって知ってるだろ？」

「でも今のショーン様は違いますよね」

「それはそうだけど。ちょっと心を入れ替えたぐらいでは、人の心証はそうそう変わらないだろ？」

「そんなことないと思いますよ。エイドリアン様なんて、ショーン様のことかわいくて仕方がないって感じじゃないですか」

「えっ？」

「『えっ？』って、気が付いてなかったんですか？」

エリックの顔はびっくりしたという表情と呆れたという表情が綯い交ぜになっている。

「いや、それは……。親友の弟だからって気を使ってくれる優しい人だと思っているけど」

前もそうだったし。

「僕にはそう見えませんけどね。エイドリアン様は、タイプじゃないんですか？」

「タイプも何も、そんな風に考えたことなかったよ」

「では、改めて考えてみたらどうですか？」

そんなこと、考えるまでもない。

「僕にとっては、もったいなくて不釣り合いな人だよ」

そう言うと、エリックは頑なな人ですねと笑った。

一日の授業が終わり、自習室に行こうかと廊下でエリックとフローラ嬢と話をしていたら、せか

せかと慌ただしく歩いてきた上級生に声をかけられた。
「君達今、急ぎの予定はあるかい？」
「え？」
自習室に行こうと思っていたけれど、別にそれは急ぎというほどのことではない。
「いえ、特には……」
「そうかい。よかった！　じゃあ悪いけど、この校舎だけでいいのでポスターを貼ってきてくれないか？　他にも準備しないといけないことがたくさんあって困ってるんだ」
ポスターは交流会のものだった。どうやら生徒会の人で、準備に追われているらしい。僕らが了承してポスターを受け取ると、何度もお礼を言い、慌ただしく去っていった。
枚数は大した量じゃない。これを三人で貼りに行くのもなんなので、エリック達には先に自習室に行ってもらった。
エリックは恐縮していたけれど、フローラ嬢を一人にするわけにはいかないもんね。
貼る場所は決まっている。この階と上の階には一か所、そして一階には三か所校内のお知らせを貼る場所がある。
剥がれないように丁寧に貼ることを心がけ、この階と上の階に貼り終え、残り三枚を貼りに一階へと下りた。
僕がこういう作業をしているのが珍しいのだろう。チラチラと視線が飛んできた。だけど以前とは違い、悪意のある者はだいぶ少ないような気がする。

立ち読みサンプル
はここまで

時々妬んだような目を向けられることはあるけど、あれはどう考えてもエイドリアン絡みの嫉妬だろうしな。
まずは一番端っこの掲示板に貼ることにする。少し風が強いのでポスターが風にあおられてちょっと苦労する。
このやろうと思いながらビスをぐりぐりとねじこんでいたら、誰かが端っこを押さえてくれた。
「ありがとう、助かった」
ひょいと顔を上げて、相手の顔を確認してびっくりした。
ブライアンだった。
「いや、これくらいは」
「あっ、どうも」
なんで？　なんでブライアンがここに来るわけ？
僕にはもう関わりたくないはずなのに。わざわざ手伝いに来てくれなくてもいいのに。
ブライアンが何を考えているのかわからなくて、嫌な汗をかいてしまう。
「生徒会の手伝いでもしているのかい？」
「えっ？　いや、そういうわけじゃなくて。廊下で立ち話をしていたら、たまたま頼まれたんだ」
「……それで引き受けたのか」
「うん」
「……」